

文化短信

カール・コリーノのムージル伝記が日本語に翻訳された

このほど東京ではカール・コリーノ著『ムージル 伝記』の日本語版最終巻となる第三巻が刊行された。これはテュービンゲン在住のムージルのスペシャリストであるコリーノが2003年にローヴォルト社から出版した記念碑的な伝記の翻訳である。これを見てもわれわれはムージルの重要性をあらためて認識しなければなるまい。日本語版への翻訳は、中央大学の早坂七緒教授の監修のもと複数の研究者からなるチームによって行われた。

『特性のない男』(1930年および1933年に刊行)を書いたこの作家はこれまで以上にアクチュアルな存在になっている。ムージルにとって問題だったのは、多民族国家であったわがオーストリアの崩壊だけではなく、1918年以降の数十年において激化する一方だった現代の危機を描き出すことだった。今日この危機はグローバルな刻印をおびるに至っている。

『特性のない男』第1巻の有名な一章である116章で、ムージルが『厳密性と魂の事務総局』の創設を要請するのは、彼がそれによってあらゆるイデオロギーや利害関係を徹底的に疑問視することを求めているからである。人はひとつの立場を選択しない限り、特性のない男にならざるを得ないとムージルは言う。

二千ページに及ぶ『ムージル 伝記』の翻訳は、同時に日本語の表意文字体系へ移し変える作業でもあったのだが、これは十年を超える壮大な仕事となった。そして、その完成を祝う場には、カール・コリーノがテュービンゲンから彼らに送った二本の赤ワインがあった。ラベルは「ムージル」である。

ヨーゼフ・シュトルツ

(写真キャプション)

日本の翻訳チームは「ムージル」ワインで完訳を祝った。

(翻訳チーム・西野 路代 訳)